

中医国际教育教科書シリーズ

総編集・劉平

副総編集・張碧英

上海中医薬大学国際教育学院総企画

中医診断学

編著・鉏桂祥 鐘祥華

上海科学技術出版社

中医国際教育教科書シリーズ

総編集 劉平

副総編集 張碧英

中医診断学

上海中医薬大学国際教育学院総企画

編著

鉏桂祥 鐘祥華

上海科学技術出版社

图书在版编目(CIP)数据

中医诊断学: 日文/上海中医药大学国际教育学院编.
上海: 上海科学技术出版社, 2009. 10
(中医国际教育系列教材)
ISBN 978-7-5323-9994-9

I. 中… II. 上… III. 中医诊断学—教材—日文 IV.
R241

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2009)第 146352 号

上海世纪出版股份有限公司 出版发行
上海科学技术出版社
(上海钦州南路 71 号 邮政编码 200235)
浙江印刷集团印刷 新华书店上海发行所经销
开本 787×1092 1/16
印张 13.75 字数 280 千
2009 年 10 月第 1 版 2009 年 10 月第 1 次印刷
ISBN 978-7-5323-9994-9/R·2709
定价: 98.00 元

本书如有欠页、错装或损坏等严重质量问题,
请向工厂联系调换

中医国際教育教科書シリーズ

総編集 劉 平 副総編集 張碧英

《中医基礎理論》

編著 張碧英 張再良

《中医診斷学》

編著 鉏桂祥 鐘祥華

《中藥学》

編著 張碧英 郭 忻

《方剂学》

編著 鉏桂祥 文小平

《中医内科学》

編著 朱根勝 鈴木康仁 村上梧庵

序

現在の世界医学システムを見ると、多くの国と地域では、西洋医学システムが主流となっており、同時に、全世界では、疾病の予防と治療をする為に、70%の人が、ある程度、伝統医学と言う手段を利用しています。

アジアの3大伝統医学システムとして、中国伝統医学は、そのうちの最大のものであり、それは深遠な中華文明に伴って海上と陸地という2本のシルクロードを通して早くもアジア各国に、伝わっていきました。これは、我々中国が世界医療衛生事業に尽くした大きな貢献です。

今日の世界医療衛生事業は、新しいチャレンジに直面しています。このチャレンジは、医学目的の調整と医学モードの転換に現れています。現代医学は、疾病を対象とし、病因の除去、病理の矯正、病巣の切除を目的とする治療となっており、こうした認識観は医療と社会の実践の中に益々その不十分な所と限局性が現れ、人々の深い反省を呼んでおり、それにより医学目的の調整と医学モードの転換と言う論議を引き起こしました。現在、元来の疾病に対抗することを目的とする医学から、健康維持、健康増進、疾病の予防、人間の自己健康能力を発揮させる事を目的とする医学へ、徐々に転換し、疾病を除去する事を目的とする生物医学も、生物—社会—心理—環境と言う医学モードへ転換しつつあります。

中国医薬学は、中華民族が長期に亘って、人体の健康を模索している過程で、累積してきた医学文化の至宝であり、その源は遠く、歴史は長く、内容は広くて奥深いものです。此処数十年来、国内外の現代医学と科学技術の発展に伴い、中国医薬学の科学価値と臨床価値が、益々世界の人々の注目を集めています。人体は1つで全体であると言う考え方、弁証論治、総合調整と言う理念は、現代主流医学に日増しに浸透し、深い影響が生まれています。多くの国々は、中国医薬を自分の国の代替医療、或いは、補助医学の一つとしています。中国医薬学は、世界に進出し、現代医学と互いに長所を取り入れ、短所を補い、人類の共通の健康問題を解決する為に、共に発展させる時代が、既に到来していると思われます。

中日両国医学文化交流は、源は遠く、歴史は長いです。1500年前に、既に、中国の灸治療術等、中国医薬の技術は、唐代の中国文化と共に、日本に渡りました。明治維新迄は、「漢方医学」は、日本の国医として、日本国民の健康の為に重要な貢献をしました。それと同時に、中日両国民を

連携する重要な文化の絆ともなりました。今日に至って、中日両国医学発展の社会文化環境に、大きな変化が起こり、両国伝統医学発展の軌跡は異なりますが、両者の間を連携する「架け橋」が、築かれていて、つまり、中医薬文化の生命力は留まる处を知りません。中医薬の古方方剤の開発・研究、及び製薬技術に対する日本の研究は、我々に多くの重要なヒントを与えてくれましたが、中医薬基礎理論、及び中薬の現代薬理に対する中国の研究は、日本国民の中医薬の科学技術と中医薬文化を勉強、理解するために手がかりを提供しました。

「長風破波会有期、直掛雲帆濟滄海」(大業を成す時が到来すれば、直ぐ帆を揚げて、大海原へ漕ぎだそう。)

中日両国の医学文化交流は、責任が重く、道程は未だ遠いと思います。私は、この『中医国際教育教科書シリーズ』の出版は、両国の医学と文化の交流に、新たな貢献が出来、新しい医学の「シルクロード」になれる事と確信しております。

上海中医薬大学

学長 陳凱先

2009年4月 上海にて

編著者の説明

はじめに、この本の編纂意図を記しておきます。

【1】出版の背景

中国医学と日本の東洋医学の理論体系は、共通する所もあり、また違う所もあります。中国医学と日本漢方では、用語が異なっており、文字が同じでも意味が違うこともあります。日本漢方でも流派によっては、必ずしも用語の意味とか内容が同じでないという、困った状況にあるのです。

ここ数年来、中国医学や中医学が世界への進出を加速しつつあり、日本に於ける「中医学」の普及ぶりもめざましく、中日医学関係者の往来と交流は、内容の濃いものになってきており、増えつつある出版物と相まって、中医学の用語や概念は中日間では、ほぼ同じになり、考え方も本格化して、伝統医学に関する共通の言葉が増加して来しました。

世界で、中医学の普及活動を推進する為、教育を行うことは大切な事です。そこで中医学を体系化した学問として、教育するための教科書を作る必要があります。上海中医薬大学は、WHOの指定している伝統医学合作センターとなっており、毎年多くの諸外国の方々の中医研修教育を実施しています。こうした背景を踏まえながら、上海中医薬大学・国際教育学院日本部の指導教師と、日本の中医事業に携わっている医者の方々と共同で『中医国際教育教科書シリーズ』（日本語版）の制作にあたっています。この教科書シリーズは、現段階では、「中医基礎理論」、「中医診断学」、「中薬学」、「方剂学」、「中医内科学」を発行しており、更にこれからも編纂を続けていきます。

【2】企画目的

この教科書シリーズは、中医学の全体像を体系的に示すと共に、基本理論や用語そして概念を明確に定義して、広く中医学を普及させ、本格的に且つ系統的に中医学を学ぼうとする日本人の為に、正確に弁証（診断）のできる日本人中医師を育成する目的で企画されたものです。

【3】この教科書の位置付け

この教科書シリーズでは、出来るだけ日本人が中医学を学ぶ立場に立って平易な文章を心が

け、概念の解釈が正確に出来るように、表現が明晰であり、内容が判り易く、理解し易いという実用的な中医国際教育教科書シリーズを目指して編纂したものです。

【4】編纂時の配慮

(1) 出来るだけ判り易い文章にしました。特に症状に就いては、最も近い日本の用語に書き換えています。しかし中医用語とも対照出来る事が望ましいので、日本語と表現が大きく異なる用語は、その言葉のすぐ後の()の中に注記しています。

(2) 中医専門用語は、出来るだけそのまま用いていますが、理解し難い処は、用語の後の()に補足説明しました。中医学の術語は、中国で使っているものを、出来るだけそのまま用いています。しかし、その中の難解な用語については、文章の最初に出て来た時に、その用語の後に意味を解釈しています。

(3) 中医専門用語は、本文の何処かに定義されていますので、各教科書の巻末に「索引」を設け、日本語の読み方も付けて、検索し易くしています。

(4) 『中薬学』の巻末に中薬の「検索」を、『中医内科学』の巻末に方剤の「検索」を設けて、日本語の読み方も付けています。

これらはすべて、今後の『中医学』の勉強に便宜を図るためのものです。

目 次

第一章 緒 論

1

一、中医診断学の主要な内容	1	(二) 診微知著	4
(一) 診法	1	(三) 以常達変	4
(二) 診病	2	三、中医診断学の基本原則	4
(三) 弁証	2	(一) 整体審察	4
(四) 病案	3	(二) 弁証求因	5
二、中医診断学の基本原理	3	(三) 四診合参	6
(一) 診外知内	3	四、中医診断学発展の簡略史	6

第二章 望 診

9

一、望神	9	(二) 顔と臓腑の配属	13
(一) 望神の原理と意義	9	1. 名称	13
(二) 望神の主要内容	10	2. 配属	13
(三) 神の表現	10	(三) 望色十法	13
1. 得神	10	(四) 常色と病色	14
2. 少神	10	1. 常色	14
3. 失神	10	2. 病色	15
4. 仮神	11	(五) 五色主病	16
5. 神乱	11	1. 青色	16
二、望色	12	2. 赤色	16
(一) 面部色診の原理およびその臨床 意義	12	3. 黄色	17
		4. 白色	17

5. 黑色	17	1. 望齒	26
三、望形態	18	2. 望齦	26
（一）望形体	18	（九）望咽喉	27
（二）望姿態	19	五、望皮膚	27
四、望頭頸・五官	20	（一）色沢	27
（一）望頭	20	1. 赤色	27
1. 頭形	20	2. 黄色	27
2. 頤門（泉門）	21	3. 黑色	28
3. 動態	21	4. 白色	28
4. 頭髮	21	（二）形態	28
（二）望面	21	（三）病症	28
1. 水腫	21	1. 斑疹	28
2. 紅腫	22	2. 水疱	29
3. 口眼歪斜	22	3. 瘡瘍	29
（三）望頸項	22	六、望小兒食指絡脈	30
1. 癭瘤	22	（一）絡脈の部位	30
2. 瘰癧	22	（二）絡脈の見方	31
3. 頸脈	22	（三）臨床意義	31
4. 項強と項軟	22	1. 浮沈	31
（四）望目	23	2. 色沢	31
1. 五輪学説	23	3. 長短	31
2. 目の色沢	23	4. 形状	32
3. 目部の形態	23	七、望指甲	32
4. 目の動態	24	八、望排出物	32
（五）望耳	24	（一）痰	32
（六）望鼻	25	（二）涎と唾	33
（七）望口唇	25	（三）嘔吐物	33
（八）望齒齦	26		

第三章 舌 診

34

一、舌と臓腑の関係および舌診の機序

（一）舌の形態構造

34

(二) 舌と臓腑との関係および舌診の 機序	34	三、舌診の内容	37
(三) 舌面での臓腑配属	35	(一) 望舌質	38
1. 胃経による割り当て法	35	1. 色	38
2. 五臓による割り当て法	35	2. 形	39
二、舌診の方法および注意すべきこと	36	3. 態	40
(一) 方法	36	4. 舌下絡脈	41
1. 光線	36	(二) 望舌苔	41
2. 姿勢	36	1. 色	41
3. 順序	36	2. 質	42
4. そのほか	36	(三) 舌質と舌苔の総合診察	44
(二) 注意すべきこと	36	四、舌診の臨床意義	44
1. 食事	37	(一) 正気の盛衰を判断する	44
2. 季節と時間	37	(二) 病気の部位の深淺を判断する	45
3. 年齢、体質、性別	37	(三) 病邪の性質を区別する	45
		(四) 病状の進退を判断する	45

第四章 聞 診

46

一、聴音声	46	8. 太息	51
(一) 正常な音声	46	9. 嘔噦	51
(二) 病的な音声	47	10. 腸鳴	51
1. 発声	47	二、嗅気味	51
2. 言語	48	(一) 病体の気味	51
3. 呼吸	48	1. 口臭	51
4. 咳嗽	49	2. 汗臭	52
5. 嘔吐	50	3. 鼻臭	52
6. 呃逆	50	4. そのほかの臭	52
7. 噯気	50	(二) 病室の臭い	52

第五章 問 診

53

一、一般状況を問う	53	二、生活習慣を問う	53
-----------------	----	-----------------	----

三、家族歴および既往歴を問う	54	1. 失眠	65
四、発病を問う	54	2. 嗜睡	65
五、現病症を問う	54	(六) 問飲食口味	66
(一) 問寒熱	55	1. 口渴と飲水	66
1. 惡寒發熱	55	2. 食欲	67
2. 但寒不熱	55	3. 口味	68
3. 但熱不寒	56	(七) 問大便	68
4. 寒熱往来	57	1. 排便回数	69
(二) 問汗	57	2. 便質(性状)	69
1. 表証弁汗	57	3. 排便感覺	70
2. 裏証弁汗	58	(八) 問小便	70
3. 局所弁汗	58	1. 尿量	70
(三) 問頭身胸腹	59	2. 排尿回数	71
1. 疼痛	59	3. 排尿感覺	71
2. 眩暈	63	(九) 問女性	71
3. 心悸、怔忡	63	1. 月經	72
4. 痞、満、脹、悶	63	2. 帶下	73
5. 困重	63	3. 妊娠	73
6. 麻木	64	4. 産後	73
7. 搔痒	64	(十) 問男性	73
(四) 問耳目	64	1. 陽痿	73
1. 問耳	64	2. 遺精	74
2. 問目	64	3. 早泄	74
(五) 問睡眠	65	(十一) 問小児	74

第六章 切 診

75

一、脈診	75	3. 三部診法	78
(一) 脈象の形成機序	75	(三) 脈診の方法	78
(二) 脈診の部位	76	1. 時間	78
1. 遍診法	76	2. 体勢	79
2. 寸口診法	77	3. 指法	79

4. 平息	79	24. 牢脈	87
(四) 正常脈象	80	25. 動脈	87
1. 平脈	80	26. 散脈	88
2. 生理変動	80	27. 促脈	88
(五) 常に見られる脈象	81	28. 結脈	88
1. 浮脈	82	29. 代脈	88
2. 沈脈	82	(六) 類似脈、相兼脈、真臟脈	89
3. 伏脈	82	1. 類似脈	89
4. 遲脈	83	2. 相兼脈	91
5. 緩脈	83	3. 怪脈	92
6. 數脈	83	(七) 女性の脈象	92
7. 疾脈	83	1. 月経の脈象	92
8. 微脈	84	2. 妊娠の脈象	93
9. 細脈	84	(八) 小児の脈象	93
10. 虚脈	84	1. 一指定関法	93
11. 弱脈	84	2. 特徴と主病	93
12. 濡脈	85	(九) 脈診の臨床意義	94
13. 実脈	85	1. 疾病の部位を知る	94
14. 洪脈	85	2. 疾病の寒熱属性を見分ける	94
15. 大脈	85	3. 邪正の盛衰を判断する	94
16. 滑脈	85	4. 気血の運行を示す	94
17. 洪脈	86	5. 疾病の進退と予後を推測する	94
18. 長脈	86	二、按診	95
19. 短脈	86	(一) 按診の方法と意義	95
20. 弦脈	86	(二) 按診の内容	96
21. 緊脈	87	1. 肌膚の按診	96
22. 芤脈	87	2. 胸腹の按診	97
23. 革脈	87	3. 腧穴の按診	99

第七章 八綱弁証

100

一、表裏弁証	101	(一) 表証	101
--------------	-----	--------------	-----

(二) 裏証	102	(三) 虚証と実証の鑑別要点	108
(三) 表証と裏証の鑑別要点	102	(四) 虚証と実証の関係	109
(四) 表証と裏証の関係	102	1. 虚実錯雑	109
1. 表裏同病	103	2. 虚実転化	109
2. 表裏出入	103	3. 虚実真假	110
二、寒熱弁証	103	四、陰陽弁証	111
(一) 寒証	104	(一) 亡陰証	111
(二) 熱証	104	(二) 亡陽証	111
(三) 寒証と熱証の鑑別要点	105	五、表裏、寒熱、虚実の関係	112
(四) 寒証と熱証の関係	105	(一) 表寒証	112
1. 寒熱錯雑	105	(二) 表熱証	113
2. 寒熱転化	106	(三) 裏虚寒証	113
3. 寒熱真假	107	(四) 裏虚熱証	113
三、虚実弁証	107	(五) 裏実寒証	114
(一) 虚証	108	(六) 裏実熱証	114
(二) 実証	108		

第八章 病因弁証

115

一、風証	115	七、情志内傷	118
二、寒証	116	八、劳傷	119
三、暑証	116	(一) 肉体劳傷	119
四、湿証	117	(二) 精神劳傷	119
五、燥証	117	(三) 房室劳傷	119
六、火熱証	118	九、食積	119

第九章 気血津液弁証

121

一、気病弁証	121	(三) 気滞証	122
(一) 気虚証	121	(四) 気逆証	123
(二) 気陷証	122	二、血病弁証	123

(一) 血虛証	123	(四) 氣不攝血証	126
(二) 血瘀証	124	(五) 氣隨血脫証	127
(三) 血熱証	124	四、津液病弁証	127
(四) 血寒証	125	(一) 津液虧虛証	128
三、氣血同病弁証	125	(二) 水液停聚	128
(一) 氣滯血瘀証	125	1. 水腫	128
(二) 氣虛血瘀証	126	2. 痰飲	129
(三) 氣血兩虛証	126		

第十章 臟腑弁証

131

一、心病弁証	131	(一) 脾氣虛証	141
(一) 心氣虛証	131	(二) 脾陽虛証	141
(二) 心陽虛証	132	(三) 脾虛氣陷証	142
(三) 心陽虛脫証	132	(四) 脾不統血証	142
(四) 心血虛証	133	四、肝病弁証	143
(五) 心陰虛証	133	(一) 肝氣鬱結証	143
(六) 心火亢盛証	134	(二) 肝火熾盛証	143
(七) 心脈痺阻証	134	(三) 肝血虛証	144
(八) 痰迷心竅証	135	(四) 肝陰虛証	144
(九) 痰火擾心証	136	(五) 肝陽上亢証	145
二、肺病弁証	136	(六) 肝風內動証	145
(一) 肺氣虛証	137	1. 肝陽化風証	146
(二) 肺陰虛証	137	2. 熱極生風証	146
(三) 肺陽虛証	138	3. 陰虛動風証	146
(四) 風寒束肺証	138	4. 血虛生風証	147
(五) 風熱犯肺証	138	(七) 寒滯肝脈証	147
(六) 燥邪犯肺証	139	五、腎病弁証	148
(七) 痰濕阻肺証	139	(一) 腎陽虛証	148
(八) 肺熱壅盛証	140	(二) 腎陰虛証	149
三、脾病弁証	140	(三) 腎精不足証	149

(四) 腎氣不固証	150	(三) 心肝血虛証	155
六、腑病弁証	150	(四) 心腎陽虛証	155
(一) 大腸濕熱証	150	(五) 心肺氣虛証	156
(二) 胃陰虛証	151	(六) 脾肺氣虛証	156
(三) 食滯胃脘証	151	(七) 脾腎陽虛証	157
(四) 胃寒實証	152	(八) 肺腎陰虛証	157
(五) 胃熱熾盛証	152	(九) 肝腎陰虛証	158
(六) 胆鬱痰擾証	153	(十) 肝脾不調証	158
(七) 膀胱濕熱証	153	(十一) 肝胃不和証	159
七、臟腑同病弁証	154	(十二) 肝火犯肺証	159
(一) 心腎不交証	154	(十三) 濕困脾胃証	160
(二) 心脾兩虛証	154	(十四) 肝胆濕熱証	160

第十一章 六 經 弁 証

162

一、六經弁証の概要	162	2. 少陰熱化証	167
(一) 太陽病証	162	(六) 厥陰病証	167
1. 太陽經証	163	二、六經病の伝変	167
2. 太陽腑証	164	(一) 伝経	168
(二) 陽明病証	164	1. 循経伝	168
1. 陽明經証	165	2. 越経伝	168
2. 陽明腑証	165	3. 表裏伝	168
(三) 少陽病証	165	(二) 直中	168
(四) 太陰病証	166	(三) 合病	168
(五) 少陰病証	166	(四) 併病	169
1. 少陰寒化証	166		

第十二章 衛氣營血弁証

170

一、衛氣營血弁証の概要	170	(二) 氣分証	171
(一) 衛分証	170	(三) 營分証	172

(四) 血分証	172	(一) 順伝	173
二、衛氣營血の伝変	173	(二) 逆伝	173

第十三章 三焦弁証

174

一、三焦弁証の概要	174	(三) 下焦病証	175
(一) 上焦病証	174	二、三焦病証の伝変	176
(二) 中焦病証	175		

第十四章 経絡弁証

177

一、十二経脈病証	177	(十) 手少陽三焦経病証	180
(一) 手太陰肺経病証	177	(十一) 足少陽胆経病証	181
(二) 手陽明大腸経病証	178	(十二) 足厥陰肝経病証	181
(三) 足陽明胃経病証	178	二、奇経八脈病証	182
(四) 足太陰脾経病証	178	(一) 督脈病証	182
(五) 手少陰心経病証	179	(二) 任脈病証	182
(六) 手太陽小腸経病証	179	(三) 衝脈病証	182
(七) 足太陽膀胱経病証	179	(四) 帶脈病証	183
(八) 足少陰腎経病証	180	(五) 陰蹻脈病証と陽蹻脈病証	183
(九) 手厥陰心包経病証	180	(六) 陰維脈病証と陽維脈病証	183

第十五章 診法と弁証の応用

185

一、病状資料の処理	185	2. 特徴性資料	187
(一) 資料の完全性と系統性	185	3. 偶発性資料	187
(二) 資料の正確性と客観性	185	4. 一般性資料	187
(三) 資料の一致性	186	5. 否定性資料	187
(四) 資料の属性	186	二、弁証の方法	187
1. 必要性資料	187	(一) 諸弁証法の活用	188